

李登輝校長自らの証書授与に感激

本会事務局次長

片木 裕一
かたぎ ゆういち



熱心に聴講する参加者(11月1日)

【初日・十月三十日】

当初、九月二十五日開催予定だった李登輝学校台湾研修団（久保田信之团长）は、都合により約一カ月延期になり、十月三十日からの開催となりました。「急な変更で参加者が減るのではないか」という心配も何のその、九月末の締切前に定員の六十人を超え、その上ひとりの脱落者もなく、最終的には六十四人で催行されました。

また、参加者は北は北海道札幌から南は九州別府（さらには台北市在住の方）まで、全国規模となりました。中には手術直後の方や、新潟在住で前日バスを乗り継いで来られた方など、今回の研修に対する熱い意気込みが感じられました。

三十日、台北・桃園空港に集合、バス二台に分乗して桃園県龍潭郷にある「渴望学習センター」へ。それにしても「渴望学習」なんて凄い名称！

かくして午後二時半到着、チェックインの後すぐに始業式。壇上に「日本李登輝学校台湾研修団始業式」と染め抜かれた大きな幕のかかる下、総統府資政で群策会秘書長の黄昆輝教頭が登場、歓迎のご挨拶とともに群策会や李登輝学校についてご説明いただき、いよいよ開校となりました（表3参照）。次に登壇されたのが校長の李登輝先生です！ 会場は割れんばかりの拍手と台湾マスコミのフラッシュの嵐（お話の内容は4頁参照）。その後、李登輝校長との記念撮影を終えて一旦休

憩、ティーブレイクなのですが、お茶だけでなくなんと飲茶やみちやもある。これは室内研修中続き、実質一日五食で参加者はいささか太って帰国したかも。

初講義は、李登輝校長自ら「台日関係と台湾制憲運動について」と題する特別講義。この日、李登輝校長はあるところで立法委員選挙立候補者の応援演説をされていたとのことで、かなりお疲れのはず。講義の最初こそ「日本語モード」切り換えが不完全で、少しぎこちないように見受けられたのですが、中盤からどんどんパワーアップ、質疑応答では立ち上がり、手振り身振り、黒板での解説付きで、終了予定時刻を過ぎてもお構いなし。ついには司会者から「今日はこの辺で」とストップがかかり、ようやく終了となったのです。その後夕食ですが、李登輝校長はここにもご出席です。

この日、前記のとおり台湾マスコミも多数取材に来ていましたが、日本式の「起立、礼、着席」には少なからず

驚いたようです。

二日目・十月三十一日

この日は朝九時から夜九時半まで、四講義の長丁場。李登輝校長は誰もが知る哲人ですが、今回の講師陣も各界の第一人者が日本語で講義するので、から、圧巻です。また、講義の内容や順序もわれわれ日本人（台湾人もいますが）を意識されてのものと思われ、

目標はひとつながらプロセスや解釈が異なり、ために次の講師がどう説明するのか、ここだけでは聞ききたいと興味はつきません。李登輝学校側も「いろいろな意見や解釈があるので、ひとつの考え方に固まってしまうことなく

視野を広く持つて欲しい」との思いがあったようで、それは十分伝わりました（後日、講義録を刊行予定）。

最初の講義は「李登輝前總統の『台湾の民主化』について」（台湾国史館館長・張炎憲先生）です。一九九〇年前後からの台湾民主化の過程を、李登輝前總統の軌跡と重ねて分かりやすく解説いただきました。

午後イチは「台湾の歴史」（台湾大学名誉教授・鄭欽仁先生）。一六〇〇年代のオランダ・スペイン統治から鄭成功、清朝、日本、中華民國各時代の概要です。これに古代史を加えるとまさに「台湾史」そのもので、学生ならば年間六十時間くらいかけるところ、わ

れわれは約二時間で学習した訳です。

次は「台湾の主体性」（淡江大学大学院教授・許慶雄先生）ですが、ここで変化する。なんと「中華民國は中華人民共和國（以下、中国と略）の旧政府であり、中国の反乱分子である。中華民國憲法は動員戡亂時期臨時條款が解除された時点で無効」と明言されたのには一同唖然。「だから新しい憲法が必要なのだ」という地点には着地するのですが、強烈な印象を受けました。

夕食の後、この日のト리는「台湾と日本の安全保障」（總統府国策顧問・黃昭堂先生）です。黃昭堂先生は日本人の感性を知り尽くしておられ、軽妙な話術は、すでにこの日六時間以上の



李登輝校長のパワーあふれる講義（10月30日）



台湾国史館館長・張炎憲先生（10月31日）



台湾大学名誉教授・鄭欽仁先生（10月31日）



淡江大学大学院教授・許慶雄先生（10月31日）

講義でかなり疲れているはずの参加者を飽きさせません。質問も殺到、司会者も大変です。

ところで、この渴望学習センターは全面禁煙で、一階正面の喫煙所が休憩タイムの際は「渴望煙草センター」になっていたのですが、夜十時、例によって十人ほど溜まっていたところに黄昭堂先生登場、「ここまで喫煙者が冷遇されるのは明らかな差別だ」と発言、面々の喝采を受けておられました。

【三回目・十一月一日】

この日の最初の講義は「台湾における憲法制定運動」（淡江大学日本研究所助教授・胡慶山先生）ですが、ここでも李登輝学校は変化球です。事前に参加者のプロフィールを渡している訳ではないのに、参加者を本当によく理解していると感じます。胡慶山先生の「日本の憲法九条は素晴らしい」「尖閣諸島の問題は微妙」といった話には、ほぼ全員が敏感に反応するのですから。

最後は「台湾の文化・文学」（小説家・鄭清文先生）です。大学助教授の娘さんが映し出すスライドを交え、少

なくとも文学には全く無知な私にも理解できるような、具体的な作家や傾向を丁寧にお話しいただきました。

これにて座学は終了、一行はバスに分乗して台北市内の「国賓大飯店」へ向います。

そう、「老台北」こと、蔡焜燦先生主催の晩餐会です。ここのメンバーがまた凄い！ 総統府賓政の陳楷模先生や国策顧問の黃崑虎先生などの出席者を全員紹介したら例によってこのコーナーが終わってしましますので、省略。料理もオリジナルフカヒレ、台北ダック、酔っ払いエビ等多彩。お土産までいただき、もう堪えられません。この日から台北市内の宿泊地は「プリンスホテル」に。部屋はシングル。しかも普通のシングルではない。部屋はあくまで広く、「ここで復習してください」というような机つき！ でも

生徒たちは夜の街へ……。

【四回目・十一月三日】

本日は野外視察研修です。最初は昨年四月に開館した淡水・八里にある考古学博物館、十三行博物館。

台湾の歴史は四百年とよく言われますが、何と千五百年以上前から台湾人はおり、固有の文化を持っていたのです。まだまだ不明なことは多いようですが、今後の調査に期待が持てます。

そして、この日の昼食は「鼎泰豊」です！ 私は十回以上台湾に来ていますが入ったことはなく、まさか研修団でここに来るとは思いませんでした。

次は二二八纪念馆です。ここでは日本語の堪能なボランティアの方三人に親切丁寧かつ感情を込めた解説をしていただきました。

最後は総統府視察です。総統選挙後の例のバタバタで一時は見学できなかったのですが、最近ようやく再開されたそうです。

この日、日本側のスケジュールでは夕食ありなのですが、台湾側はフリーを予定していたようです。しかし、今回の研修を実質的に取り仕切られた群策会活動推進処長の莊孟学さんはすぐに事態を察し「大丈夫」と一言、即座に淡水の有名レストラン「紅樓」を用意されたのでした。皆様、感謝！

【五日目・十一月三日】

最終日ですが、修業式の前に特別懇談会が設けられました。当初は李登輝校長がご出席の予定だったのですが、所用でどうしても出席できないとのことと、代わって登場されたのが何と二日目の講師の黄昭堂先生。それだけで

も凄いの、前駐日大使で現在、亜東関係協会会長の羅福全さんも一緒に。この二人のツーショットなど減多に見られるものではありません。

加えて「台北の故宮博物院の宝物は中国に返すべきか」という質問に、黄昭堂先生は「あんな中華文明の象徴みたいなものは台湾海峡に捨ててしまえ」、一方の羅福全先生は「世界的な文化遺産で宝物なのだから、どこで保管してもいい。それが台湾でも」と正

反対、会場は爆笑の渦です。
そんな特別懇談会も終り、いよいよ修業式です。台湾マスコミ各社が取材する中、二日目から今朝のバスの中まで繰り返し練習した「阿輝伯啊」の合

唱で李登輝校長をお迎えします。

修業式のご挨拶の後、参加者の発案で急遽「仰げば尊し」を合唱、李登輝校長の目にも光るものを見て思わず涙された方も少なくなかったようです。

李登輝校長は六十四人全員に一人ずつ「修業証書」を手渡されました。その後、李登輝校長や黄昭堂、羅福全先生などと昼食を共にし、一同感激の裡に李登輝学校は終了しました。

なお、李登輝学校からはお土産として台湾産のお米（玉里香米）をなんと二袋四kgもいただいたのですが、帰国後、「ああ、同じ釜の飯を喰った仲間という意味で持たせてくれたのだ」と、遅まきながら気づいた次第です。



総統府国策顧問・黄昭堂先生（10月31日）



淡江大学日本研究所助教授・胡慶山先生（11月1日）



小説家・鄭清文先生（11月1日）



蔡焜燦先生主催の晩餐会（11月1日、国賓大飯店）